

令和6年度 東広島市総合教育会議 議事録

1 日 時 令和6年11月29日(金) 開会10時00分 閉会11時30分

2 会 場 東広島市役所本庁舎本館3階303会議室

3 出席者 (構成員)

東広島市長 高垣 廣徳

東広島市教育委員会

教育長 市場 一也

委 員 渡部 和彦 (教育長職務代理者)

委 員 棚橋 健治

委 員 島本 智子

委 員 柏崎 恵

(その他の出席者)

学校教育部長 片岡 隆夫

教育監 神笠 一義

健康福祉部長 福光 直美

こども未来部長 中村 保

都市部長 台信 達観

生涯学習部長 伊藤 明子

地域共生推進課地域共生推進係長 尾崎 諭

(事務局関係)

総務部長 鈴木 嘉一郎

総務部次長兼総務課長 大石 美廣

総務課課長補佐兼行政経営係長 早坂 康弘

行政経営係 主事 宮田 遥

4 欠席者 東広島市教育委員会 委 員 京極 秀樹

5 議 事 こどもの居場所について

6 内 容

○開 会

○高垣市長あいさつ

○議 事

こどもの居場所について

<高垣市長>

それでは、早速でございますが、議事に入ります。

昨年の12月に、こども家庭庁から「こどもの居場所づくりに関する指針」が策定されました。国は推進体制として、こども政策担当部署がリーダーシップを取る方法や、教育委員会がリーダーシップを取る方法等、地域の実情に応じて関係者が連携・協力できる体制の構築を期待しています。とりわけ、福祉部門と教育の連携が重要と考えておりますが、まずは、こども未来部から、指針に関する背景と理念、考え方等について説明をお願いしたいと思います。

本日の会議では、各関係部から情報提供をさせていただき、それに基づいて、委員の皆様からこどもの居場所づくりについてご意見をいただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくをお願いします。

それでは、こども未来部から、こどもの居場所づくりの指針及び居場所に関するこども達の声について説明をお願いします。

(資料説明：こども未来部長)

<高垣市長>

こどもの居場所づくりに関する指針を受けて、本市の取組の方向性をこども計画の中で定めるために、アンケート調査を行いました。アンケートの中でこども達の想いが浮かび上がってきております。

続いて、現在本市がどのような取組をしているかについて、関係部局から紹介させていただきます。健康福祉部から説明をお願いします。

(資料説明：健康福祉部長)

<高垣市長>

ありがとうございました。今回、こどもの居場所づくりをテーマにしておりますが、論点は2つあると考えています。まず1つは、放課後あるいは土日のこどもの居場所をどうしていくのかということ。またもう1つは、コロナ禍を経て不登校のこども達が増加しているという非常に重大な問題があり、不登校のこども達の居場所をどうするのかという論点があると考えています。健康福祉部が行う取組は福祉施策でありますから、不登校あるいは不登校気味なこども達をどう支援するかに重きを置いております。

次に、教育委員会学校教育部の方から、現在の不登校のこども達に対する施策を紹介します。まず、現在の状況について数字等をお示ししたいと思います。それでは、先程配布した

資料について、学校教育部から説明をお願いします。

(参考資料説明：学校教育部長)

<高垣市長>

3年間で急激に不登校児童生徒が増加したという実態があります。その中で学校教育部の取組について説明をお願いします。

(資料説明：学校教育部長)

<高垣市長>

続いて、学校のみならず、放課後を中心としたこどもの居場所への対応について、生涯学習部から説明をお願いします。

(資料説明：生涯学習部長)

<高垣市長>

続いて、こどもの遊び場ということで、市内の公園の状況について都市部から説明をお願いします。

(資料説明：都市部長)

<高垣市長>

ありがとうございました。各部局からの説明について質問等があればお伺いします（質問なし）。

ここまでは本市の施策について紹介させていただきました。資料1の4では、昨年3月に文科省が示したつながりのイメージ（COCOLOプラン）を掲載しています。ここでは、行政、学校、地域社会、各家庭、NPO、フリースクール関係者等が相互に理解や連携をしながら、子ども達のためにそれぞれの持ち場で取組を進めることが必要であるとしており、支援が必要な子ども達が学びに繋がるようにすること、すべての学校を誰もが安心して学べる場所に変えることを速やかに実行すべき、としています。

必要な支援は子ども達一人一人の状況によって異なることから、連携して、一人一人に応じた多様な支援が必要になります。

これまでの本市の取組は、教育関係者を中心とした取組がなされてきましたが、今回初めて子どもからアンケートを取ることにしました。これは、子ども計画を作る上では、子ども達の意見を反映したものにするという子ども家庭庁からの指導に基づき実施したものです。その結果が、最初に子ども未来部長から紹介した、資料1の2における小学5年生と中学2年生のアンケート結果になります。実はこの結果で意外だったことは、放課後過ごしたい理

想の場所として、自分の親と一緒に、自分の家と答えたこどもが一番多かったことで、こども達にとって一番重要な場所であることがはっきりしました。本市ではいきいきこどもクラブを運営しており、その位置づけは保護者の就労のための支援に重きが置かれていますが、こどもの視点で運営されているのかという点については、実は反省すべきで、課題であると感じています。こども達の立場に寄り添えば、家庭が一番の居場所になるのですが、両親の働き方や核家族化が進んだ昨今の状況からすると、居場所を家庭だけに求めるのは難しいところがあります。そうした中では、地域を含めて、どのような支援の枠組みが必要なのかというのが一つの論点になってきていると感じています。これから委員の皆様からご意見をいただく中で、そういう視点でのご指摘もいただければと思っています。

それではまず、直接教育委員会と関わりをお持ちの市場教育長から、今後必要な居場所、取組主体の連携、支援等といった視点でご意見をいただきたいと思います。市場教育長、いかがでしょうか。

<市場教育長>

まず、こどもの視点という部分では、先ほど市長からありましたアンケート結果が非常に参考になります。また、もう一つ、この度本市が市制施行50周年を迎えるにあたり、こども達の作文コンテストを実施しました。こどもの放課後の居場所について、小学5年生の作文では、放課後に使える児童生徒向けの場を提供して欲しいと書かれておりました。その理由は4つ挙げられており、1つ目が、近くに屋内で遊べる場所がないということ。2つ目が、家の近くには図書館がないということ。3つ目が、家で集中できないとき、留守番中に、学習に使える場所が欲しいというもの。4つ目は、一人でリラックスできる場所が欲しいというものです。これに基づき、次の3点が提案されています。

1つ目は、放課後に自由に利用できる施設を新しく整備してほしいというものです。2つ目は、地域センターに児童生徒向けのコーナーを作って、そこで宿題ができるようにして欲しいというもの。3つ目は、学校を放課後に開放し、放課後に図書室でこども達が過ごせる場所にして欲しいというものでした。

まさに先ほどのアンケートの結果と類似しますが、こども達は身近なところで居場所を求めています。そうするとやはり、学校や地域センターが身近なところなので、これから非常に重要な場所になっていくと考えており、今後施策を考えていく上で様々な連携が必要であると認識しています。

連携の実施主体についてですが、令和6年度末をもって、市内全ての小中学校区にコミュニティスクールの配置が完了しました。学校を核とした地域づくりや、地域のコミュニティ機能の拡充のために、コミュニティスクールを中心とした人との連携やネットワークの形成を期待しています。その中で、こども達の居場所という役割も担ってほしいと考えています。教育について、学校の中だけでは限界にきているのを痛感しています。地域と共にある学校で、こども達の教育に対して、地域の方に当事者意識を持って関わっていただきたいという思いがあります。以上です。

<高垣市長>

ありがとうございました。この問題を学校だけで解決するのは本当に難しいことで、家庭と地域とが一緒にこの問題に真剣に取り組んでいく必要があると考えています。ここ3、4年で全ての小学校区と中学校区にコミュニティスクールを配置できましたので、この枠組みは本市の課題解決に向けた重要なパートナーになってくると思っているところです。

先程のこどもの作文の中では、身近なところに居場所が欲しいという提案がいくつかありましたが、そこで地域センターを挙げられていたので、こどもはよく見ているなという感想を持ちました。当初、地域センターはどちらかと言えば、会社をリタイアした人が中心となって、地域の生涯学習等をしていただく場として想定していましたが、こども達にも生涯学習の一環として、地域センターを利用する権利は当然あるわけで、そこに目が届いていなかったなというのを改めて感じました。

続きまして、渡部委員、お願いします。

<渡部委員>

まず不登校の問題からお話できればと思います。先日、広島県の不登校対策に関する会議があり、各市町の教育委員の皆さんが集まって会議を行いました。それぞれの地域での取組が挙げられていましたが、その中であまり具体的に語られていなかったのは、不登校のこどもはなぜ発生するのか、についてでした。

こどもがクラスで疎外され、その結果、学校に行けなくなってしまうことが多いですが、その状況で、担任の先生をサポートする体制ができているのかが重要になってくると思います。担任の先生も他の先生も非常に忙しく、なかなか手が回らないという現実もありますが、クラス内での課題を担任だけに押し付けるのではなく、教職員全員がサポートできるように、例えば担任の先生が情報を抱え込んでしまわないように、他の先生に公開する場を設ける等、共通の問題として取り組む体制づくりが重要だという認識を持ちました。

それから、地域の具体的なスペース・居場所ですが、私は、地域の高齢者の健康づくりや生きがいのためにリーダーを育成するという「生きがい健康体育大学」を25年前から始めております。現在は年間50名ずつリーダーが育っているのですが、実際に活動の場をどこにするかというときに、浮かんできたのがやはり地域センターで、地域の学校の空きスペース等も利用できないかという具体の話にもなっていました。そういった点で、こどもの居場所問題というのは、高齢者問題とある意味で共通点を持つと感じましたし、そこでの活動をサポートする、訓練を受けたリーダーが必要ではないかとも思いました。

また、放課後のスポーツ活動についてですが、文科省のスポーツ庁が中心となり、放課後のスポーツ活動を広げていこうという動きがあります。現在は、居場所のないこども達のためというより、むしろ選手育成の方に力を入れているように感じていますが、やはり孤独感を感じているこども達に、居場所としてスポーツのできる場が必要だと思います。そこに活動を牽引できるリーダーが必要だと思いますし、そこに対する支援や、ノウハウを共有し公開していくことが求められている時期だと感じています。

<高垣市長>

ありがとうございました。不登校問題から、3つのご指摘をいただきました。

1つ目は学校そのものの問題で、なぜ不登校になってしまうのか、状況や原因等を情報共有しながら、サポート体制を作って取り組むべき問題ということ。2つ目は、居場所としての空きスペースについて、地域センターや学校の空きスペース等を活用し、そこで活動する担い手リーダーをどのように育成していくかということ。3つ目に、学校スポーツをどのような形で展開していくかということでした。先生方の働き方改革の一環の中で、部活動の地域移行が大きなテーマになっていますが、地域部活動のリーダー養成、そして居場所の無い子ども達の集まれる場のできるのではというご指摘をいただきました。

市場教育長、教育委員会としてこのあたりの問題に現在どのように取り組んでいるのか、お伺いします。

<市場教育長>

不登校になってしまう背景ですが、「無理して学校に行く必要はない」という、保護者の意識が変化してきたことと、コロナ禍の影響が挙げられます。その中で要因別に見ますと、学校生活に対してやる気が出ないというのが一番多い要因になります。次点で、不安であるとか、生活リズム等の問題が続きます。また他の調査結果によれば、やはり学校の先生との関係も要因の一つではないかと考えています。

学校の指導体制ですが、スペシャルサポートルーム（SSR）を設置しており、そこに専任の職員がいれば、SSRを利用している児童生徒の情報がありますし、その情報を職員全体で共有することができます。またSSRに専任の職員がいない場合は、手の空いた教員が空き時間にSSRに行き、関わりを持つというやり方をしています。SSRに不登校も含めた子どもの情報を把握する専任の職員がいれば、学校全体での情報共有や、家庭との連携も可能になってきます。一方で、専任の教員でなくても、スクールカウンセラーやこころのサポーターがいますので、そこと連携し、学校内での情報共有を行っている状況です。こころのサポーターは、常時学校にいるわけではないので、常時いてくだされば、さらに情報共有がうまくいくと感じています。

部活動も、現段階では、令和9年度までに、土日の部活動を学校ではなく地域の中で進める予定です。部活動の中には勝敗や入賞にこだわる競技スポーツもある一方で、子ども達が入賞や勝敗に関係なく楽しめる活動、例えば生涯学習の中にもある料理教室やパソコン教室、eスポーツ等、そういった地域にある様々な文化活動ができる土日の部活動を展開していきたいと考えています。そのために、生涯学習部や様々な関係部局、または企業との連携を進めているところです。

<高垣市長>

ありがとうございます。不登校が急激に増えてきた背景として、もちろん学校の中でのいじめ等に端を発してというものも依然としてあると思いますが、急激な増加の背景としてはやる気の喪失や、不安感、コロナ禍によって自宅で学習ができる環境になったという生活の

リズムの変化等、要因は複合的ではないかというものでした。

いずれにしても、担任の先生だけで問題を解決しようというのはなかなか難しいと思います。多くの人の手によって、そこに地域の方も含んで問題に取り組んでいくことが今後必要になり、こどもの情報をどのように共有していくかが大切だと思っています。不登校になってしまった子に対しては、SSRやこころのサポーターが中心となって、学校に復帰できるよう様々な取組をしていますが、こども達に「学校が楽しい」と思ってもらえるような場にしていく必要があるんでしょうね。これは我々の課題だろうと思いました。

それと、こども達自身から学校を開放して欲しいという声が上がっています。私も就任してからずっと、学校という場を、放課後にこどもの教室として開放したり、地域活動に活用できないかと思ってきましたが、かつて大阪教育大学附属池田小学校でこども達が殺傷事件に巻き込まれた事件があり、おそらくあの事件を契機に、放課後はできるだけこども達に帰ってもらい、学校の門を閉じましょうという傾向になってきたのではないかと考えています。

島本委員は校長先生のご経験もありますし、学校運営でのセキュリティ事情も含めて、学校を今後オープンな場として活用することについて、ご意見をいただければと思います。

<島本委員>

不登校の問題は今でも胸が痛みます。20年30年前の話ですが、自分が教員のときも突然学校に来なくなった子がいました。こどもに理由を訊くと、家では洋式トイレなのに学校では和式トイレだから嫌だとか、また当時の学校にはエアコンが整備されていなかったのが暑い、寒いといったようなものもありました。当時はこども達の家には祖父母が居たので、今日は一日家に居てもいいよと、親が仕事に行っている間にこどもは家で畑仕事を手伝う等、祖父母と過ごし、心が落ち着き、次の日は学校に行けるというケースが実際ありました。しかし今は核家族化が進んでいて、なかなか親以外の大人がこどもを支えて見守ることは難しいのだと思います。また、特に今は家で平気で過ごせる環境であることも一因だと思います。家で自由にゲームができたり、ネットで友達と繋がったり、学校に行かなくても家の中で過ごせるということですね。昔と今でかなり状況が違っていて、こどもの気持ちを汲み取るのは難しくなってきましたし、こども自身も心の中で葛藤していることがたくさんあるのだろうなと思いました。

そういう中で、東広島市がたくさんの居場所を設けているのは良い動きだと思います。しかしその設けた場を、こどもや保護者、学校側がしっかり理解できているのかは疑問です。場によってどのような区別があって、こういう子にはここに行くの良い等の認識が、少し学校側とずれがあるのかなと思います。それから、居場所とは空間のイメージがありますが、綺麗な机や椅子、絨毯、本がたくさん置いてあっても、そこに話を聴いてくれる人、味方になってくれる人が居ないと、居場所として長続きはしないと思っています。また、何時ですよ、帰りましょうといったような時間的な制限を設けてしまうと、そこは学校と同じ場になってしまいます。先程市場教育長がおっしゃったように、こどもは近い居場所を望んでいて、例えばフレンドスペースは保護者の同伴が必須ですが、一人で行け、お金もかからないことは重要なのだと思いました。そして最終的には、そこで勉強やゲーム、料理教室等、様々な

ことをする中で、自分は役に立っているんだ、自分には役割があるんだと実感できるような場にする必要も必要で、様々な活動や人を介して、自分探しや幸せ探し、友達探しができる居場所になったらいいなと思います。

学校をオープンな場とすることについてですが、先程市長がおっしゃったように、附属池田小の事件以降、子どもを守らなくてはという意識で学校を閉めるという傾向になったと思います。しかし、門を閉めることと開かれた学校づくりは別物です。先日、耐震化工事中の東西条小学校を見学させていただきましたが、玄関を通らなくても外からも入れる場所にある図書館の開放はいいなと思いました。女性教育委員で竹原や福山も視察してきましたが、図書室が広くて素敵なところでした。セキュリティ面は不明ですが、ああいった図書館でゆっくり本を読んだり、友達と話したりできればいいなとも思います。もし変えられるなら、ぜひ学校の図書館の位置を変えたりして、オープンな場にしていったらいいのではと思いました。

それから、居場所づくりのための様々な活動は、最終的に持続可能なものにしていかねばならないと思いました。例えば子ども食堂に、環境問題や食品ロス問題をつなげ、商店やスーパー等もつなげて様々な人が関われるようにする等、単発で考えるのではなく、何かと何かを関わらせて大きくしていくことが重要です。様々な人が集まって知恵を出したことが、一本筋の通った活動として継続していくのだと思いました。

自分は大切にされていた、愛されていたと、いつか成長した子ども達に実感してもらうことを教育者としては信じている気持ちです。居場所や環境の中で、様々な人に味方になって話を聴いてもらった経験、必要とされた経験を糧に成長した子ども達が、東広島に帰ってきて東広島の役に立ちたいと思ってくれたらいいなと思いました。

<高垣市長>

ありがとうございました。いろいろご指摘いただきました。居場所とは必ずしも空間ではなく、人がいる場であり、ここにずっと居たいと感じられる場であるというのは、大変示唆に富んだご指摘だと思いました。

かつて多世帯が一緒に住んでいるときは、親が忙しくても祖父母が孫の面倒を見られたので、もう一度学校に行こうという気になれたり、自分なりの生き方を考えられる環境にあたりたものだと思います。今は残念ながら、核家族化によりその傾向は薄れてきていますので、「子ども達は地域の宝である」と考えてもらうような取組を進めることが重要だと再確認しました。先程の渡部委員のお話にも通ずるものですが、地域には、高齢者が多くいらっしゃいます。高齢者の方は様々なキャリアの中で、生きる知恵というものをしっかりお持ちですので、そういうものを子ども達に教えられる場があれば、それこそがまさに居場所だと感じたところです。

成功事例で図書館の開放のお話もいただきました。図書館を開放し居場所にするのは大変重要ですが、新しい図書館をどんどん作るわけにはいきませんから、既存施設を有効活用する視点で他市の事例も見ながら取り組む必要があると思いました。

それから、持続可能な居場所づくりについて、貧困問題だけではなく、世の中にある様々

な社会課題をうまくつなげることによって、持続可能な取組に進化させていく必要があるとご指摘いただきました。その辺りも今後検討していければと思いました。

それでは、棚橋委員、お願いします。

<棚橋委員>

本日のこの会議で申し上げたいと思っていたことは4点あります。これまでの議論や、既に東広島市の施策で着手されていることなので、目新しいことではないですが改めて申し上げたいと思います。

まず1つ目は、市長がおっしゃったように、「こどもの成長は社会全体で支えるもの」という原点に立ち返る必要性です。そのためには、社会全体の意識改革、啓発というものが必要になってきます。やはり今の日本社会では、こどもの成長には学校が中心に、あるいは主導的になっていくべきだという考え方が根底にあり、言うなれば「学校は万能である」という意識で、同時に「すべての責任は学校にある」という考え方が多いのだと感じています。そこを再考する必要があると思いました。歴史的に見ても、農業社会から工業社会に変わったとき、生産と生活が分離された時点で社会は大きく変わりました。もともとは村落にて、こどもは大人が働いている姿を見て育ち、働いている大人もこどもの生活を見ているので、こどもが他所のおじいさんに叱られるというのも一般的でしたが、生産過程が工場に入ってしまったことで、その光景が完全に切れてしまいました。これは世界中そうであって、社会構造の変化でやむを得ないことではあります。だからこそもう一度、意図的に少しでも、社会全体でこどもを支えていた光景を新しい社会構造の中でどうやって作り出すかが重要な課題だと思うんですね。各部局から説明ありましたとおり、まさに本市での取組はその光景を実現させようとしているのだと思います。

その時に地域センターの話になりますが、今までは高齢者の場のように扱われてきたのが、こどもにとっても重要な場だという認識になり、こどもの場としても機能させようという実践が増えてきています。これは大変いいことであって、学校においても異年齢の交流は大事にしている、同学年だけではなくて、1年生から6年生までの縦のつながりが実践されています。地域センターで高齢者とこどもがつながるといのは、まさに社会全体での究極の異年齢交流であって、かつての三世代のつながり、祖父母と孫というような関係が新たに作り出されるということであるため、実現するために具体的な策を考えていく必要があると考えます。

それと、先程教育長からありました部活動の地域移行の問題ですが、私は積極的に進めるべきという考え方でいます。教員の負担軽減のためだけのように受け取っている人もいますが、それは結果的にそうであるだけだと思っていて、放課後に好きなことができるクラブ活動や部活動等、すべての事柄が学校の中で完結してしまうと、その学校の中で精神的な居場所がないこども達にとっては、少し言葉は悪いですが逃げ場のない状態になってしまいます。それらが地域移行することによって、こども達は学校という枠から離れて好きなことができるようになります。こども達が多様な活動を行えるようになるので、社会全体でこどもを支えるという意味でも、地域移行は必要と思っています。

最後に、先ほど島本委員から、居場所というのは空間だけではないという話がありましたが、居場所というのはやはり精神的に落ちつければ、安心できる場所、そこに居て楽しいと思うところだと考えたときに、学校に長時間いるから学校が居場所だとは安易には考えられないんですね。もちろん学校の在り方は学校教育として考えなければならないところですが、それだけではなく、施設として学校を使うにしても、学校以外の人間関係が築けるような場とする可能性は考えてもいいと思っています。

<高垣市長>

ありがとうございました。これまでは学校に対して、「学校は万能である」という意識がやはり強かったという気がします。そうであるが故に、本当は素晴らしい職業であるにもかかわらず、教師とはブラックな職業だというイメージが持たれ、先生のなり手が少ないという問題にもつながっていると感じていますので、我々も学校に対して意識改革をする必要がありますし、市民にも共有する考え方として、こういう視点からの生涯学習も重要ではないかと思いました。

その上で、地域センターは大きな役割を果たす場になります。市がコミュニティスクールを推進してきたのは、地域の力を借りながら子ども達を健全に育てていければという狙いがありました。必ずしも全ての学校で十分に活動できていないところもありますから、テコ入れする中で、地域センターの活用についてアプローチが必要だと思いました。

実は今朝のNHKで不登校についての番組があり、子どもだけではなく、保護者にとっても精神的な不安感が生まれ、仕事も辞めざるを得ないという状況にもなる問題とのことでした。なので、子どもが不登校になってしまった保護者同士のネットワークを形成すれば、お互いが支え合い、安心感を得られる場になるので、保護者にも居場所が必要という話もありました。そのような視点も必要だと感じたところです。

それでは、柏崎委員、保護者の視点からご意見を頂戴したいと思います。

<柏崎委員>

そうですね、保護者の間でも話をしていると、不登校の子どもが増えてきているなという実感があります。そうなるとうやほり親は心配ですし、不安になります。先程「学校は万能である」という意識を転換させなければならないというお話がありましたが、保護者は生活でいっぱいなので、学校に頼ってしまいたいとか、学校が万能であって欲しいという気持ちがどうしても強いのだと思います。そこに働きかけて、子どもは学校だけでなく地域で、みんなで育てていくものだという意識の転換が必要になってきている時期だと感じました。

また、保護者がいっぱいいっぱいになっていることのしわ寄せと言いますか、親の余裕の無さの影響で子どもも落ち込んでしまい、不登校になってしまうというケースも増えているのかなと感じています。子どもの居場所づくりは勿論ありがたいのですが、同時に保護者同士の繋がりを作る場所も提供して欲しいなと思っています。追加で配布された参考資料中の、「不登校になった際、学校からの情報提供がなく困った」とか、「孤独を感じた」と

いう保護者の悩みは、保護者の繋がりがあることで解消できるのではないかと感じました。

他には、部活動の地域移行が進んでいますが、これに伴って部活をしなくなるこどもも増えるのではないかと不安の声が上がっています。地域に移行した部活動から外れてしまった子の居場所を心配していて、時間と力があり余ってしまう子が、何か悪いお誘いに乗ってしまうのではという心配の声もあります。

また、学校はコミュニケーションの練習の場だと思っています。コロナ禍を経て不登校の増加が目立ちますが、コミュニケーションの練習が不足している子が増えてきたからではと思っています。自分で自分のことを助けられる力といえますか、「助けて」「これがわからなくて困っている」等の発信ができず、誰にも相談できずに自分の中に抱え込んで苦しくなっている子もいるのかなと感じられますので、身近なところに、しんどいと思ったときに不安なくすぐ行けるような居場所が必要だと思いました。距離的にも心理的にも遠い居場所よりも、ふっと立ち寄れる学校の図書室や地域センターが候補に上がっているのはとてもいいなと思います。

<高垣市長>

おっしゃるとおりで、働いているお父さんお母さんの立場からすると、頼るところは学校だという意識がこれまで強かったのだと思います。そこから、学校だけではなくて他にも頼れる場を提供できれば、お父さんお母さん達の考え方も少し変わってくるのかなと感じています。学校が万能であって欲しい、そして、いきいきこどもクラブにも万能であって欲しいという保護者の皆さんの思いは痛感しますが、現実はずしもそうはいかない。そういう中で、地域の皆さんのお力を借りることで、高齢者にとってもこどもにとっても、双方にとっていい効果も出てくる可能性があると思っています。高齢者の皆さんにとっては、孫ぐらいのこども達と一緒に過ごす中で、生きる喜びのようなものを感じるかもしれないですし、こども達は一緒に居てくれる大人に対して尊敬の念を抱いたりするかもしれない。地域に絆というものができてくるような気がしています。本日のお話を整理してみると、やはり地域の力をどう活用していくかが焦点になりましたね。

それと、相談できる力にも言及していただきました。学校とは勉強をする場であると同時に、友達あるいは先生とどうコミュニケーションを交わすかという練習の場でもありますね。この練習の場が、コロナの間で多少なりとも阻害されたのではないかなと私も感じています。また、「助けて」と言葉にして発せられるかというお話ですが、これも重要だと思いました。市はこれまでも地域共生社会を実現しようと施策に取り組んできましたが、必要なのは支える人もですが、「支えて欲しい」という言葉を発せられるかどうかも重要で、それができないと、たくさんの社会問題が見えない所に潜在してしまいます。「助けてください」と言えるような環境・社会を作れないかと思い取り組んできましたが、まさに学校も同じだなと実感しました。

部活動の地域移行についてもご指摘いただきました。部活を地域移行してしまっ、そこに自分がやりたいことがなかったときに、そのこども達が持っている時間と溢れるようなエ

エネルギーを、どううまく消化してあげるのかというのは実は大きな課題です。これまで、学校の先生方がクラブ活動や部活動に力を入れてきたのは、こども達のそういう一面を理解していたからこそで、非行に走らないようエネルギーを発散させる場を設けてきてくれたのだと思います。これらの事情を地域の方にもご理解いただく必要があると思いました。ありがとうございました。

一通りご意見を頂戴したところで、私の方から一つ問題提起させていただければと思います。市内には社会福祉施設や宗教法人等、福祉に関係する場がたくさんあります。こどもの居場所を考えると、場所や箱をどうするかという問題が常にありますので、市内にある既存の施設をうまく活用できないかとずっと思ってきました。特にお寺や神社は、私のこどもの頃は遊びの場であり、生き方など様々なことを教えてもらえる場でもありました。ただ、政教分離の問題があり、行政が表立って宗教法人に何かを依頼するという事はタブー視されていますので、そういう議論はほとんどなされていませんが、実際、地域活動に取り組んでいただいているお寺は既にあります。コミュニティソーシャルワーカーが中心に取り組んでいる活動ですが、お寺に地域のおじいちゃんおばあちゃんとこどもが集まって、お花や書道、囲碁や将棋を教えたり、一緒に音楽を奏でたり等の活動が実際あります。政教分離等の課題はありますが、ここでの連携も一つの道なのかなと常々考えている所です。

渡部委員、いかがでしょうか。

<渡部委員>

とても現実的で、大切な視点だと思います。高齢者の健康づくりの場でよく思っていたのが、ストレッチや体操は案外、畳の間とかの方がしやすいんですね。そういう場をお寺さんに協力していただければ、地域の身近なところにもなりますし、高齢者にとっていいなと以前から考えていました。お寺よっては、お坊さんがジャズをお好きで、地域の皆さんと一緒にジャズを演奏してコミュニケーションをとる、そういったお寺も実際あります。時代の変化でこどもの居場所が少なくなったことを一つの契機に、ソーシャルワーカーの方々と連携しながら、お寺での地域交流のため働きかけをして、新しい価値観を作っていくこともできるのではないかと考えています。

<高垣市長>

棚橋委員、いかがでしょうか。

<棚橋委員>

昔は確かに、お寺とか神社等でこども達が遊ぶ光景が普通であり、特にお寺に依頼したり等がなくても、自然発生的に交流があったものですから、特に違和感もないし、かつては問題だと指摘する人もいなかったと思います。社会全体でこどもを育てるという意味では、理想の形だと思うのですが、ただやはり難しいのは、市長もおっしゃったように、今それを組織的に依頼してしまうと、特定の宗教を贖罪している等問題視する方もいると思います。なので、なかなか具体的な策が浮かばないのですが、市が組織として依頼するという形ではな

く、昔のように子ども達が住職さんに叱られながらも、お寺で遊び、お年寄りと交流する中で育つという光景が自然発生するように、何か環境整備ができないかなと思います。

<高垣市長>

自分がこどもの頃を振り返ってみても、最初にお寺に行ったのは、おじいちゃんおばあちゃんに連れて行ってもらってからですね。お寺行事の折に連れて行ってもらい、そこで地獄極楽の紙芝居を見たり、善悪とは何かを教わったりした記憶があります。今は核家族化で祖父母もなかなか孫と一緒に居ないし、親は仕事等が忙しくてとても連れて行けないという状況です。そういう状況下では、やはり自然発生的な形で、お寺や神社が地域の居場所になることが有効なのかもしれませんね。

柏崎委員、若い保護者の皆さんからすると、お寺や神社に行こうというのは、どういった感覚をお持ちでしょうか。

<柏崎委員>

初詣のときにお邪魔するくらいで、また実家の法事で来ていただく程度しか関わりが無く、なかなか遊び場という雰囲気では捉えられていないのではと思います。

<高垣市長>

おっしゃるとおりだと思います。今の若い保護者にとっては、お寺は葬式や法事等、そういう特別な行事でなかなか関わりがないのだと思います。昔は日曜学校というものもあって、説法を聴いたりしたこともあったのですが、今はあまりそういうこともやってないような気がしますね。

島本委員、いかがでしょうか。

<島本委員>

今は保育園を開いているお寺もありますので、こどもの居場所、地域での交流の場の一つという意味で違和感はないと思いますね。私は退職してから仏教婦人会に入っていて、それまではなかなかお寺に行くこともなかったのですが、そのお寺では夏にサマースクールを開催されていて、子ども達が集まってすいか割りやゲームをしたりしています。

お寺もどんどん若い住職さんに代替わりしているので、おそらく今までとは考え方が変わってきているのかもしれないですね。お寺の存続にも関わりますし、もっと自分たちから発信して、いろんな方にお寺に来てもらおうという意識があるのだと思います。営利や布教という目線から離れて声をかけてもらう分には、特に若い住職さんは耳を傾けてくれるような印象を持っています。

<高垣市長>

ありがとうございます。どのような形で関わるべきか、参考にさせていただきます。

<渡部委員>

今は新しい住職さんが変わっていると思いますが、その前は並瀧寺で、毎年春に 100 人以上が集まって音楽会をしていて、私も毎年行っておりました。地域交流に力を入れてくださっているお寺はいくつかあると思います。

<高垣市長>

ありがとうございました。

本日はこどもの居場所について、様々な視点から委員の皆様にご意見いただきました。「学校は万能である」という理想を求めるのは、もう難しい時代になってきています。市も様々な取組を試行錯誤的に行っていますが、少なくともこれまでの取組だけでは、こどもの居場所としては十分ではありません。居場所の機能を学校に求めるのにも限界があるので、やはり地域の皆さんに「皆でこどもを支え、育てていく」という意識を持ってもらうことが必要なのだと明らかになったと思います。市の施策でも、次のテーマとして取り組んでいきたいと思っています。

今回の議論は不登校が中心となりましたが、実は放課後のいきいき子どもクラブも居場所として重要です。運営状況はかなり大変な状況にあって、ここをどうしていくかが大きな課題となっています。柏崎委員、保護者から見て、いきいき子どもクラブについてどのような認識をお持ちでしょうか。

<柏崎委員>

現在は行っていませんが、以前はいきいき子どもクラブにお世話になっていました。そのお世話になっていた所は土日に開いていなかったもので、土曜日だけ少し離れた別の所にこどもを預けていました。親としては土曜日に働けるのは大きく、土曜日もこどもを預かってもらえたらと思いますが、そうすると、家に居たいというこどもの気持ちと相反する結果になってしまうなど。親が家にいない時間を増やすのもどうなのかなと思いつつ、親としてはこどもの居場所を作って欲しいと思いつつ、悩ましいところです。

<高垣市長>

資料中の、居場所に関する子ども達の声というアンケート結果ですね。一番多いのが自分の家で、親と一緒にがいいというもので。保護者の皆さんもこのような認識でしょうか。

<柏崎委員>

親も同じ気持ちだと思います。親としてもこどもが心配なので、一緒に居られるものなら家で一緒に居たいと思います。家で仕事ができるならいいのですが、どうしても外に働きに出ないといけなくなると、こどもが家で一人きりでいるよりはと、いきいき子どもクラブや別の塾に預けているということだと思います。

<高垣市長>

おっしゃるとおりで、こどもが「家に居たい」と言うのは親として嬉しい話ですが、現実問題、親は働いて稼がなければならなくて、それでやむを得ずこどもを預けるというような状況にあると思います。

親の働き方について、働きたいという希望も考えなければならないけど、日によってはできるだけ早く帰って、こどもと一緒に過ごす時間を作るという価値観が普通になるよう、企業や経営者の方に働きかけることが重要だと思いました。また、夫婦の間での仕事のシェアという、男女共同参画の議論にもなると思います。こどもの居場所づくりという直接のアプローチではないかもしれませんが、働き方に理解がある男女共同参画社会を作っていくことが同時に必要で、行政としても推進していく必要があると思いました。

本日は様々な視点から貴重なご意見をいただきまして、誠にありがとうございました。いただいたご意見を踏まえて、来年度以降の施策に向けてしっかり庁内で検討してまいりたいと思いますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、これもちまして本日の日程を終了します。進行を事務局にお返しします。

<事務局>

委員の皆様、本日はありがとうございました。いただいたご意見は議事録としてまとめ、公開することとしております。後日ご確認をお願いいたしますので、どうぞよろしくお願い致します。また、この総合教育会議は、協議・調整が必要なことがございましたら、随時開催するものでございます。その際にはご協力いただければと存じます。

それでは、本日の会議はこれにて閉会いたします。ありがとうございました。